コレクター・プライズ 結果発表

3331 ART FAIR
Organized by 3331 Arts Chiyoda

住吉慶太［住吉 慶太賞］

ナガタマコト（メインギャラリー）

傍嶋賢［SOBASUTA 賞］

島村祥太（体育館／gallery G）

この度は作品を買わせていただきました傍嶋です。とても良い作品に出会えてうれしかったです。これからも作品制作がんばってください。

武内竜一［武内 竜一賞］

大原舞（メインギャラリー）

太刀川英輔［太刀川 英輔賞］

菊池暁子（体育館／秋田公立美術大学）

自然は取るに足らないスケールの小さなものの中に本当の美しさを見せてくれる。
それを克明に写し取ろうとする菊池暁子の姿勢に共感した。

ツツミエミコ［ツツミ エミコ賞］

高橋功樹（教室／ Gallery OUT of PLACE TOKIO）

磨く。この動詞が作品になっていて 一本の象徴的な素材を磨いて漆喰を塗った作品はかなり好きなタッチでした 素材はキャンバスの木枠。磨き上げて元の形も無くなっているのに 木枠を組むときの穴の跡がわずかに残っているのもポイントです。

関優香（体育館／美学校）

版画の線は饒舌。弱さが気になりました。弱いのに強いと感じるのはなぜか？ 細い線が探るように震えている。でもためらっているわけではない。大好きなミュージシャンのサインを粘土で立体にしてから デッサンするという実に巧妙な作品だとあとから知り強さの訳がわかりました。

寺内俊博［Shibuya Style Prize］

鈴木のぞみ（メインギャラリー）

遠山正道［遠山 正道賞］

楊珪宋（メインギャラリー）

リアルな草は、トニーマテリや須田義弘などブロンズや木彫など超絶的なものも見てきた中でいえば、セラミックはむしろプリミティブでもあり、そのてらいのないテカりも、なにか欺いてやろうというギミック感も薄い。
普通に家の窓際の棚にでも置いて、ある時小さな甥っ子などがそれをチラ見して密かに何かを発見したような一人だけのトキメキでも誘発できたら、そんな例えば 8 年後の午後、のための装置を所有した。
2027 年の午後に、きっとそれは実現している。

笹岡由梨子（メインギャラリー）

とある京都での展示後に京都府の方々と共に打ち上げでご本人と飲み、二人でかなり深く絡んだ。
内容はもはや覚えていないが、翌日のメールに、悔し涙だ必ずビッグになるだのが書かれていた。
作家との関係でいえば、そんな時間を共有できたのはまさにコレクター冥利に尽きる。
そしてそのような欲やガッツを剥き出しにして結果にコミットするなら、もはや作家として勝ったも同然であり、コレクターとしては早目に取得するしかしようがない。
きっと本人は予定より早くビッグ成就するだろう。

宮北裕美（メインギャラリー）

作家のダンスはまだまだ観ていない。
日本のコンテンポラリーダンスは、カンパニーを持続させること自身が至難となっている。
ダンスによる公演の尺なども、今後柔軟に考えを変革していく必要があるのではと思う。
そんな折り、ダンスというものをベースにしながら切り出した別の表現の試みは意義があると感じる。
また、鑑賞者がアートをアート脳としてだけでなく広く日常や他の領域と交錯させたまま接する機会が増えていると感ずる昨今、ファッション的視線やスマホ的視覚を取り込めていると感ずる。

特定非営利活動法人 Art & Society 研究センター
［Art & Society 研究センター賞］

村上慧（メインギャラリー）

家を背負って各地を移動し他者の敷地を借りて寝泊まりを繰り返すという行為を通じて立ち現れる複雑な社会システムをテーマとして、他者との間にある境界や繋がり、私的 / 公的の微妙な重なり具合を常に意識して制作している。
今回のアートフェアでは、自分のスタジオにある樹木に住所のプレートを彫る行為と、そこから派生した家と樹木のドローイングを展示、「アートフェア」というシステムを特に意識した「作品」としている。またその作品は総体として、ありふれた木に番地を彫り込むという私的な行為が公的なプレートというしばりや社会システムに組み込まれてゆくという現象を視覚化しているようでもある。アート＆ソサイエティ研究センターではアートと社会との関係性に注目して研究と実践をおこなっており、その意味で村上慧氏の作品は複層的な視点を提供してくれる。引き続きその活動の展開に期待したい。

徳光健治［タグボートプライズ］

安原千夏（メインギャラリー）

プロのアーティストとして頑張ってもらいたいと思います。

中尾豪［美術 Academy&School 賞］

山本智子（体育館／コウイチ・ファインアーツ）

購入＝部屋に飾れるもの、ということを主眼に置き作品を観て歩きました。
作品にはブレーメンでは見慣れた景色なのであろうか、釣り下げ式の街灯が電線から等間隔にぶら下がり、異国情緒を誘いつつも、ほぼそれ以外の情報が排除されている。
部屋に飾ると新しい窓が増えたような気がする。
でも、その窓はいつもの見慣れた眺めの延長線上ではなく、いつか訪れた何処か異国の街の風景へと誘い込まれ、時と物理的な距離を超えてまた旅を始める。
もしかすると、新しい旅へと繋がる入口なのかもしれない。
鑑賞する側とのシンクロニシティ、同じ窓を覗き込んでも見ている景色は十人十色だろう。
作品を一見しただけでは見逃してしまいそうなギミックも愛らしい。